

◇身近な野鳥調査を続けて 笹野義一(地域 P&C 第 2 期).....	1 頁
◇今夏の“酷暑”に思う 村田武一郎(理事長／地域 P&C)	2 頁

身近な野鳥調査を続けて

笹野義一(地域 P&C 第 2 期)

野鳥のデータベース作成を目的に、2015 年に、皆さんの協力をいただき、身近な野鳥調査を始め、今年 11 回目の調査を実施しました。

この調査では、野鳥に関心のある方もない方も気軽に参加できるようにということで、観察場所はふだん日常生活をしているところ、観察対象の野鳥は身近にあたりまえにいる野鳥を中心に目に留まった野鳥とし、どれくらいの多さと感じたかを「見た目の多さ」という「多い」「やや多い」「普通」「少ない」の 4 区分に分け、どの区分に当たったかを感じたままにチェックし、2019 年からは、見た目の多さの個体数を「羽数」という形で記録していただきました。すべて観察者が「その時」に感じたもので、ふだん何気なく感じているところのものとの異同が表示されていると思います。これまでの調査から身近な野鳥の姿が見えてきたように思います。

調査年		2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025
観察記録		あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり
見た目の多さ (人数)	多い		1				1					
	やや多い	1		1		1	1	3			1	2
	普通	7	3	3	6	5	8	7	3	2	4	1
	少ない	2	6	7	3	7	10	14	3	4	4	2
見た目の多さと羽数の関係 (羽数)	多い	—	—	—	—		4					
	やや多い	—	—	—	—	4	3-6	3-7			2-10	10
	普通	—	—	—	—	3-10	2-10	1-10	2-5	2-5	5-6	
	少ない	—	—	—	—	1-5	1-5	1-2	1-3	1-3	2	2-4

上表は、ある野鳥の記録で、「観察記録」、「見た目の多さ」、「見た目の多さと羽数の関係」の 3 項目についてまとめたものです。「見た目の多さ」の数字は調査年の区分ごとの観察者の人数です。2025 年の「普通」1 は、この鳥を観察した時に普通にいと感じた人が 1 人であることを表しています。「見た目の多さと羽数の関係」は、2025 年で見ると、「やや多い」欄の 10 は「やや多い」と感じた 2 人が 2 人とも 10 羽だったということ、「少ない」の 2-4 は「少ない」と感じた 2 人がそれぞれ 2 羽から 4 羽の間の異なった数を記録したということ、「普通」欄のブランクは、個体数が未記入ということを表しています。

表から、この野鳥については毎年観察できていて、見た目の多さでは「普通」か「少ない」と感じている人が多いことがわかります。個体数については 2020 年の 4 羽を「多い」、10 羽を「普通」と感じるなど個人差があるということがわかり、それだけ身近にいる野鳥であることがわかります。

宅地造成や樹木の伐採、野草や藪の刈払い、原っぱの駐車場整備など野鳥の棲息環境の変化によってこれまで観察していた鳥がいなくなったり、個体数が減少することを、コメントからも窺うことができました。また、棲息場所が開発によって消滅し、そこにいた野鳥が集まってきて個体数が増えることがあります。

今後も調査を継続することで多くのことが見えてくると思うのですが、分かりません。調査を通して、野鳥のみならず野鳥が棲息できる身近な自然環境を、調査に協力くださる皆様と一緒に見守っていきたいと思っています。

今夏の“酷暑”に思う

村田武一郎(理事長／地域P&C)

今年は、“酷暑”が続きました。ひと月遅れて、ようやく秋の入口でしょうか。

気候は、これからどうなるのでしょうか。どこかの大国の大統領が「地球温暖化はフェイクだ」と大声で叫んでいます。この国は、これから地球温暖化物質を大量に排出し続けることになるのでしょうか。情けないことです。

今年は、気温上昇だけでなく、海水温が異常に高くなりました。大阪湾の場合、年間海水温変動の平年値は10℃～26℃ですが、今年は、神戸港で33℃もの高温が記録(第5管区海洋保安本部海岸情報部「神戸港の海水温」)されました。

地上の私たちは、年間0℃～32℃のなかで暮らしていますが、魚介類は年間15℃ほどの変動のなかで暮らしています。海水温が1℃上昇することは、陸の温度が2℃上昇するに相当する変動です。上記の神戸港のように平年値と比べて7℃も高いということは、陸上の私たちが14℃も高い状況下で暮らすことに相当します。これでは、海の生態系に大きな影響が生じます。釣りに行けば、日に日に釣り人が減っていました。暑いことと同時に、魚がいなくなって釣れないからです。

私たちは、本州で獲れるはずのブリやフグが北海道で豊漁となっている、北海道でよく獲れていたサケが不漁である、といったような情報に多く接することになりました。陸上でも、北海道がコメの大産地(新潟県に次いで全国2位)になっています。

数年前から、春・秋が極端に短くなり、四季の国が二季の国になってしまいました。このような環境変化は、人類の増加と人間の欲望の際限ない拡大に大きく依るものでしょう。日本は、省エネルギー技術を飛躍的に進展させてきたのですが、それでも、エネルギー利用の総量は減りません。

大規模な山林火災、台風やハリケーンの巨大化、極地の氷の急減、海面上昇……、このようなことが常態化し、人類にも危険が迫っています。AIは、莫大なエネルギーを消費しつつ急拡大しています。身近においても、熱中症の危険が増しています。冷房に頼らざるを得なくなり、エネルギー消費と生活コストが上がっています。負のスパイラルとでも言うべき危機です。

私たち一人ひとりが対応できることはわずかですが、皆が問題への明確な認識と強い意識をもって、温暖化対策に取り組んでいかなければならないことは確かです。適度な温度での空調機の利用、徹底したゴミの分別・リサイクル、公共交通機関の利用と車利用の抑制、本当に必要なもの以外は買わない……。次世代へ良い環境を引き継がなければなりません。

大学・研究機関と産業界は、温暖化対策技術を次々に開発しており、大いに期待しています。政府には、強いリーダーシップによる国内の温暖化抑制、温暖化物質を大量に放出している国々への削減の働きかけ、発展途上国への支援の拡大を期待します。